

# 基調講演

10:30 ~ 12:00



## 第1部 講演

# 子どもとどうやって接するの？

講師 田中章二氏



皆さん、おはようございます。このような場にお招きいただき、大変光栄に思っております。

私、生まれは鹿児島です。ちょうど1歳のときに父親の仕事の関係で、

今の北九州市の八幡のほうに移りました。父は新日鉄の会社に勤めておりました。高校まで北九州にいました。大学を卒業し、和歌山のほうにお世話になっております。もう和歌山人になっております。

今日は、「子どもとどうやって接するの？」というテーマをいただきました。私、普通のお父さんです。ですけれども、子どもたちを育てていくに当たって、いろんなことを考え、思い、そして人から教えていただき、やってまいりました。

2012年のロンドンオリンピックには、本当にわがままで、ぜいたくな夢が実現しました。スポーツの世界でオリンピックというのは一つの目標だろうと思われれます。けれども、最初からオリンピックなんて考えていません。

たまたま私は、和歌山オレンジ体操クラブという社会体育クラブの中で体操を教えておりました。一緒にやっていたのは、今現在、和歌山工業高校におられる伊熊という先生で、オレンジの創設者は伊熊先生なんです。私はお手伝いしておりました。

当時、和歌山北高校におりましたので、長男の和仁に、「体操やるか」ということを言うと、「やる」という返事が返ってきたので、小学校1年からやらせ始めました。そのときから、「じゃ、オリンピックか」というと、そうじゃないです。将来、スポーツはやらせてあげたいと思っていたので、何かやる

うという思いでやらせ始めました。

オリンピックの話を中心に、体操の話も入りますが、今日いただいた40分、どうやって子どもと接してきたか、私なりに考えたこと、それからものの見方、子どもらに問いかけたことなどを少しお話ししたいと思います。課題を投げかけてみたいと思います。私、九州生まれですので、九州弁と、標準語少しと、和歌山弁と混じって話をすると思います。どうかよろしくをお願いします。

まず、先ほどからちょっと言いかけてきたオリンピックが最終目標かと、そうじゃないですよね。子どもらがスポーツをやっている中で、スポーツというのは、私は、遊びだと思っています。今、遊んでいる中で、そして現役が終わったら、社会に長く生きる時間のほうが多いですよね。ですから、どうやって社会に出て行くかが問題だろうと思います。

本当にオリンピックを考えているというのは後々のことです。2009年に初めて世界選手権という大会に和仁が出て行きました。世界で個人総合4位、平行棒で銅メダルという成績で帰ってきました。そのときに初めて、あっ、この子ら、ひょっとしたら3人、オリンピックという場所に行けるのかな。それまでは一応体操の専門家として、いい体操を、正しい体操、本物を教えてあげたいなという思いでやってまいりました。

2010年には和仁と理恵が世界選手権に行って、理恵はそのときにロンジン・エレガンス賞という金メダルにも匹敵するようすばらしい賞をいただいて、何て幸せなんだろうというふうに思っておりました。理恵は天真爛漫な子です。結構ずばずばものも言いますし、明るくて、本当に小さいときから笑顔が僕も好きだった子どもだったんですけども、いきなり、「来年の東京世界選手権、それからロンドンオリンピック、これに兄弟3人で行くよ」なんていうようなことをマスコミさんに言いました。私はそれを聞いて、何てことを言うんだよ、口が裂けても僕らは言えません、そんなことはね。先のことなんか分かりません。ですけども、平気でそうやって一つの目標ですよ。目標をぼんと投げかけられたんです。そのときに初めて、あっ、この子ら、ひょっとしたら、そのレベルに来ているのかもしれない。そうしたら、本気で狙いたいなという思いに少し変わっていきました。



本気でオリンピック

2011年の世界選手権では、佑典はゆかで頭から落ちて、それから理恵も和仁もチームに満足な貢献をすることができなくて、本当に不本意な思いで終わった試合でした。私も帰ったときに、普通だったら、ラインやったり、メールをしたり、電話をかけたという事で、子どもたちにその感想を話すんですけども、5日ほどしませんでした。僕が落ち着いてから初めて電話をすることができました。

ロンドンオリンピックの予選、2012年の4月と5月に試合がありました。4月に2日間、5月に2日間の4日間の試合でオリンピック選手が決まるんです。10人です。男女10人。その中で、ものの考え方の一つとして、4日間の試合があつて決まるんですよと考えると、皆さん、どう思いますか。一日一日をしっかりしなきゃいけないだろうと、これは当然だろうと思います。失敗した日の影響が心にずっと残ってしまったら、だめだろう。だけど、子どもたちに話したのは、「4日間もあるの、いいね」。まして男子でしたら、6種目あります。6×4=24、24回も演技をさせてもらって、初めてオリンピック選手を決めるんですね。だとしたら、24回のうち1回ぐらい失敗しても何てことないでしょう。だから4日間で決まってしまう、一日一日頑張らなきゃいけないという思いと、ああ、24回演技できるんだ、4日間で24回の演技をすればいいんだ。1回ぐらい失敗したって、そのときは心の持ち方が違いますよね。そういう話を子どもたちにはよくしていました。ですから、今やっていること、生きていること、練習していること、試合していること、勉強していることも含めて、毎日が楽しい。楽しいというのは、すばらしいことだと思います。私

も定年してもう5年、再任用で今お勤めさせていただいていますけれども、毎日が楽しいという思い、少しでも何か楽しいことがあればという気持ちをいつも忘れないようにしています。

ちょうど2012年のとき、私も普通の親父だろうと思います。世間体を考えますよね。「体操の田中3兄弟、オリンピック」と言われると、予選を、皆さん考えているのかどうか分かりませんが、そんなことはすぐには言えないと思うんですけれども、そうやって掻き立てられてしまうと、3月ぐらいにゼロだったらどうしよう。ゼロもあり得るんです。体操競技は失敗したら負けなんです。相手と戦いません。器械の上で自分が演技をして、それを採点してもらって、順位が決まる競技です。ですから、相手を引きずり落とすこともできないんですよ。反対に言えば、私、体操競技を見ていて、試合の中でいつも高校生がやっても、3人がやっても一緒なんですけれども、ライバルが失敗すると、心の中でよしと思うんです。チャンスというふう思うんです。ですけれども、それはみんな思っていることですよ。意地の悪い競技だなどというふうには思いませんけれども、相手の失敗を喜ぶなんていうのは、日本人的ではないと思うんですけれども、でも、チャンスと考えます。

そのゼロが頭から離れなくて、授業中も、トイレに入っても、風呂に入っても、ゼロだったらどうしよう。あり得ることですよ。50%以上の確率であり得るんです。

ですから、何か自分で消極的だな、積極的なものの考え方ができていないなと思って悩んでいたときに、ちょうど玄関に宅急便が来ました。そうしたら、平べったい大きな荷物の中に色紙が入っていました。「日本体操復活、和歌山オレンジ体操クラブ、頑張れ」という色紙でした。その差出人が坂井義則さん、この9月に亡くなられましたけれども、坂井義則さんでした。私、面識ありません。よく上京したときに行く居酒屋のところで、私が会ったこともないんですけれども、オーナーと話をしている、オーナーが、「田中3兄弟のお父さんが来るんだよ」という話があって、3人で行ってほしいよねというように話を語って、そうしたら坂井義則さんが住所を聞いて、私のほうに色紙をくれました。

スポーツの世界というのは、試合は時の運とも言

います。流れというのがあります。玄関でその色紙をいただいたときに、私は、武者震いしました。ひょっとしたら、この3人、行くかもしれない。流れに乗っているという目に見えないものですが、いろいろな人にお世話になり、いろいろな人に教えてもらってやってきたのが3人だと思います。

私自身もそうです。若い指導者にやり方を教えてくれ、この技のやり方を教えてくれ、教わりました。尊敬するような若い指導者もたくさんいます。昔、自分たちがやったところで、いいところは残していきたい、変えなきゃいけないところは変えていきたいという思いでやっていたから、いろいろな人にお世話になりました。

その人の流れ、人の出会いの中で、この坂井義則さんの色紙は、あつ、ひょっとしたらオリンピックのラインに乗ってきたのかもしれないという思いがありました。若い方は知らないと思いますけれども、坂井義則さんは東京オリンピックの最終聖火ランナーの方です。ご自身もオリンピック候補には挙がっていましたが、本番には出られていない方ですけれども、最終聖火ランナーで火をつけた方ですね。だから、その人からもらった色紙が私の心をぽんぽんと開いてくれました。

5月になったときには、もう頭の中で「3でなきゃ嫌だ」と思っていました。3人のうち誰か落ちても、慰める言葉というのは全く用意していなかったです。

試合のたびに、子どもたちにラインやメールで言葉を渡しています。「健康、安全で、成功でいってよ」とか、「楽しんでやってください」とか、「点数は後からついてくるものです。集中しなさい」とかというようなメールをいつも打っていました。ですけれども、3人でなきゃ嫌だという思いに駆られたのが、このときでした。

私、子どもの接し方の話の前に、体操のプロですので、

「体操とは空間というキャンパスにみずから描き出す芸術である。一瞬にして消えてしまうが、人の心に残像あり」というこの文章、私自身の体操の考え方です。体操競技、点数をつけて、人と競います。これ、体育館にも、子どもたちにも、高校生にも、ジュニアにも見られるように貼ってあります。

ですから、技を教えるのではなくて、技という一つの動きを芸術的にどれだけきれいに、人を魅了するように、そして人の目に焼きつくようにやるのかという思いで、いつも指導はしています。ですから、下手な子がまぐれでできると喜ぶんです。そうすると、周りの人が、「おお、まぐれや、今の」とか言うんですけれども、わざと私は、まぐれが大好きなんです。ということは、下手だった子がそこまでいくということですよ。絶対にそこまでいけるということです。みんなから、「まぐれやないか」とか言われると、普通はちょっとショックですよ。腹が立ちますよね。ですけれども、まぐれが出ると、僕は喜ぶんです。そのことを子どもに伝えると、子どもも今度は違った考え方で、まぐれじゃない、ここまではいけるんだとしたら、もっと練習してみようとか、もっと考えてみようとかいう発想に変わってきます。ですから、言葉のかけ方次第一個、それから自分の思いの信念一個をきちっと持っておくと、子どもたちはそれ一つで、まぐれができたときに、「いや、先生、まぐれで、できました」とは言わなくなります。「ここまでいけますよね、先生」と言うたら、「ああ、いくよ。大丈夫だよ」。それをやっているうちに、またもう一つ上のまぐれが出てくるんです。どんどん、どんどん前向きに考えてやっていくということは、私はいつも考えておりました。

ですから、芸術家ですよ、あなたたちは芸術家です。目線は、体の線は、足先の神経の配り方というふうに教えていきます。これは小さい子どもでも一緒です。

芸術という言葉を行いましたけれども、これは和仁の伸身トカチェフという技ですけれども、鉄棒の



鉄棒／伸身トカチェフ（和仁：ロンドンオリンピック）

高さは2メートル80ぐらいあります。その上でちょうど今飛び越すために、車輪の最中にここでほんと勢いを、方向を変えてあげて、飛び越して、そのままずっと体を伸ばしたまま回ってきて、もう一回持つ技です。ちょうど今、ほんと突き放したところです。こういう人間の日常生活の中で見られない姿勢というのは、私は美しい部類だろうと思っています。

これは理恵の大ジャンプですけれども、180度開くようにほんと足を、後ろの膝を軽く曲げていますけれども、浮いているように見えますよね。そして指先、手の先まで、目線は後ろを向いています。こういうジャンプしたときに、後ろをこうやって見ると、次は立てません。ですけれども、自分が今空中のどこにいるというのを認識しながら、こういうジャンプをするんですけれども、これも僕は美しい一つのポーズというか、一瞬間ですよ。

この瞬間というのはおもしろいんですけれども、サッカーでもラグビーでもバスケットでも、上手な選手というのは連写でばばばばと写真を撮りますよね。そうすると、ほとんど全部きれいなんです、一流と言われるような上手な選手。動きの途中でも、目線だとか、体の形だとか、バランスだとかというのが整っているんです。ですけれども、まだ未熟な高校生を連写で撮ってあげます。そうすると、あっ、この写真いいね、みんなにこうやって外に張り出せるねというぐらいの写真は、高校生だと、30枚撮って、よくあって三、四枚。一流選手ですと、30枚ばばと連写で撮って、ほとんどが使えますね。だから、一流とまだ未熟な選手というのは、その辺に差があるように感じるんです。確かにバスケットなんかのうまい選手というのは技術も高いだろうと思うんです。その技術の中にスポーツの美しさとい



ゆか／ジャンプ（理恵：ロンドンオリンピック）

うもの、造形の美しさ、それを僕はつい見てしまいます。

体操の話ばかりではだめですので、高校生にも中学生にもよく話をするんですけども、子どもの仕事って何ですか。高校生に、「子どもの仕事、おまえらの仕事は何」と授業中とかでも聞くんです。多分、お父さん、お母さん方も、子どもの仕事ってこれやろと。いろんなものの考え方があると思います。その中で自分の信念を持って、これとこれとこれはうちの子には絶対という信念というんですか、一つの目標というんですか、それを持っておられるのかどうかというふうにちょっと思います。

高校生は、「勉強に決まってるやないか」と言うんです。ああ、そうか、勉強か。そうやな、勉強、おまえら学校で授業を受けて、8時間受けて、宿題が出たりしたら、家庭でもやって、勉強やな。じゃ、お父さん、お母さん、一生懸命働いて、給料もらったり、それから家庭で必要なお金を稼いだりしながら自分たちを育ててくれて、一生懸命会社で仕事をし、家庭で仕事もする。そして、社会にも貢献する、町内会のつき合いもやる、いろんなサークルにも出て行って、社会に貢献する仕事をちゃんと大半のお父さんは持っている、お母さんも持っている。おまえらの仕事は何、勉強だけかと聞きたくなるんです。

じゃ、もっと聞くけれども、おまえ、その仕事、本気でやっているか、一生懸命しているか。この間赤点とったのに、さぼってへんかとなるんですよね。赤点というのは何人かしかいませんけれども、たった50点ぐらいしかとらなくて、一生懸命やっているか、仕事をしているかとなると思うんです。

私は私なりに、3人が小さいころも、子どもの仕事というのは、まず勉強やと。これは間違いのないと思います。それから、遊べ、遊びですよ。それから、社会性を学ぶ。この社会性を学ぶというのは、人間性を高めるという意味も含めて、常識も分かっていたり、まず一つ、お葬式に連れて行っても、どうやってお参りするんやとか、社会で一応こうしなさいというようなことをきちっと学んで、やっていく。この3つが僕は子どもの仕事だろうと思います。これは年齢に応じて変わると思います。小学校1年生の仕事もこれに近いと思います。高校3年生でもこれに近いと思うんです。各年齢に応じた社会性や、それから遊びというのが出てくるだろうと思うん

です。

勉強を通して学校で、家庭で知識を集めてやらなきゃいけない。「分からないことでも、覚えておけ」と言っていました。そうしたら将来、何かの拍子に話を聞いたりしているときに、ぼぼっと頭の中でシナプスがつながって、あっ、これかと分かる時がたくさんあるんです。我々もそういう経験をたくさんしていると思います。ですから、それが分かるためには、分からんことでも知識として頭のタンスの中にいろんなことを入れておく。もちろん、分かっていることはタンスの中にしまっておいたらいいです。ですから、知識が乏しい子というのは、なかなか知恵が生まれにくいと私は思っています。

同じオレンジクラブの子どもたちにも勉強の大事さというのは、そういうふうにやっていくと、練習とつながるんです。いろんなパターンの練習を考えて、今、やらなきゃいけないパターンはこれだなというふうに自分で気づいたり、ひらめいたりすることができるというのは、いろんなやり方、高校生が練習して注意されたり、指導されたりしているのを見て、一番下の子のほうに教えてやっていると見ていて、あっ、俺、ひょっとしたら忘れていたとか、そういうのをひらめくのも大事なことだろうと思います。

それから、遊び。これは友達とのコミュニケーションが一番大事ですね。

それから、夢中になるものを一つ持たせる。それらは体を鍛えるものと、頭を鍛えるもの。それらを親が選別してあげるといえるのは、よその子はよその子、うちの子はうちの子という発想で、うちの子はこうやってやりたい、育てたいという思いはありました。

社会性を学ぶというのは、よく第二次反抗期とか言いますが、うちの子、実は私も妻も兄弟げんかを見たことがないんです、おかし1個でも。お兄ちゃんが多分、一番下の子が、「お兄ちゃん、食べていい」と言ったら、「いいよ」とあげていたんだろうと思うんですけども、実際に高校生になっても、私も妻も兄弟げんかを見たことがないです。だから、上手にやっていたんだろうと思います。よそで隠れてやっているという意味じゃなくて、本当に仲のいい兄弟だなというふうになっていました。

この中でもう一つ言いたいのは、遊びということですが、遊ぶ中で、一生懸命遊んでというのは言いました。体操は遊びなんだよということ。体操をやり始めたけれども、体操が主の生活じゃないんだよ、ちゃんと勉強してよ。小学校のテストは100点でなかったら、許しません。中学校は80点でいい。高校は70点。これ中・高に行きますと、センスが要りますよね。物理のセンスとか、数学のセンスが要りますよね。私なんかは数学のセンスがあまりないので苦労したほうですけども、それがあるので70点でいいんです。基本となる小学校のものの考え方や見方、授業を受けて真剣に受け取る姿勢、そういうのは100点でなきゃいけないと思うんです。90点とったりするときもあります、80点のときもあります。でも、それを家に帰って、「お父さん、ここ間違うた」「そうか、やってみ」と軽く言うたらいいんです。やっていて、「お父さん、分かった」と言ったら、先生が80点と書いているのを私が消して、100と書き直してあげていました。「これでオーケーや」。だから、間違っても別にいいやん。でも、今分かったらいいやろというようなことで、子どもとは接していたように思います。

先ほど、体操は遊びだよと言いました。そのかわり、真剣に遊んでよ、本気で遊んでよ。上手になろうとしたり、体操というのがどんなのかというのを、こんなもんなんだよというのを、私はずっと持ってやったような気がします。男の子は2人、長男と次男は、私が専任コーチとしてやりました。理恵は、私が専任コーチになったことは一回もないです。地元の和歌山ジュニアという女子だけのクラブ。私のところは男子だけです。ですから、女子だけのクラブのところに預けて、小学校、中学校を過ごしました。一番最初の1年生から2年生までは先ほど言いました和歌山オレンジ体操クラブのもう一人の伊熊先生が動機づけで体操を好きにしてくれました。

そのやってきている中で、要するに夢というもの、「夢を持て」とよく言われるんですけども、じゃ、スポーツをやっていたりして、オリンピックという夢を持ったらいいと思うんです。思うんですけども、じゃ、それをどうすればそこに実現するのといったら、目標を変えていく、実現するための計画を立てる。これはコーチ、監督の仕事も大きいですね。それから実行する、これは本人ですよ。努力と根

性。根性論、一時期というか、根性なんて要らないんだよというようなことを言われる方もいましたけれども、私、社会で生きていく中で、日本語の「根性」という言葉がなかったらだめだと思っています。ですから、その言葉の意味ということで、「根性は持ってなきゃだめだよ」というふうに言います。そして試合に臨むということで、こういうつながりというのは子どもたちによく話をしておりました。



これは私が40ぐらいのときに、まだ未熟なコーチで、未熟な父親でいたころに、ほんと見た文章です。このときに頭をがーんとたたかれた気がしました。「心が変われば、態度が変わる」というふうになって、「運命が変わったら、人生が変わる」。なるほど、だから楽しくやっていく。楽しくやっけながら、これを見ていますと、いい言葉だなとは思うんです。これは練習にもかかわってくるんです。練習のやり方、取り組む気持ちがちょっと変わってきた。そうしたら、子どもたちの練習をやっている態度が少し変わるんです。態度が変わってくると、準備がさっさとできたり、むだな時間をつくらなかったりというふうに行動が変わってくるんです。飛びついたときに、練習の内容が変わってきます。そうしたら、毎日やる練習のパターンが変わってきます、習慣が変わってくるんです。その子がえらい今度はしっかりしたように見えてくるんです。おっ、すごいな、こいつ。そうやっていると、今度、習慣が変わって試合に出て行くと、点数が変わるんです。きちっと体操ができるようになってくるので、いい点数をもらえるんです。いい点数をもらえたら、何が変わるかという、ランクが変わるんです。今まで負けていた子にすっと勝てるようになる。ランクが変わってくると、今度は自信が変わりますよね。

自信が変わってきて大きな大会に出始めると、自分が一生懸命頑張ってきたから、出られたんだけど、運命みたいなものも違って来る。そうすると楽しくなってきた、自分の夢がもっともっと広がってきて、人生が変わる。これ、確かに流れとして、こんな簡単にはいきません。いきませんが、年月をかけて、ゆっくりゆっくりやっていくことによって、心を少しずつ前向きに前向きにしていける。ですから、これも私自身が頭をがーんとなぐられたくせに、体操場にも貼ってあります。黙って貼ってあるだけです。多分、これを読んで小学校1年生が感じることに、高校3年生が感じることは違うと思うんです。だけれども、「いろんなことを前向きに考えてよ。自分をうつにして、下がっちゃダメよ」ということは言います。ですから、見て、いろんなことを置きかえたりしたときに、小1と高3の子では違う文章を読んでいることになるだろうと思います。

「勝利の女神は、その人の性格の内にあり」。これは私がつけ足しました。

これ、「人生七変化」という題がついていたようですけど、作者不明という説明があったり、ヒンズー教の教えですと書かれたりしています。どなたがつくったかは、私も知りません。

5歳、3歳、1歳のころは、こんな顔をしていました。

親の役目、1個。僕が子どもを持って初めてやったときに、親というのはそうか、こんな字を書くのか。これが国語的に正しいかどうか分かりません。木の上に立って見る。立っておかなきゃいけないん



5歳、3歳、1歳のころ



11歳、9歳、7歳のころ

ですね。座っちゃいけないんですね。危ないとき、危険なとき、それから人に迷惑をかけているときには、おりていって、すぐ注意もしなきゃいけない。いつまでも一緒にいるわけにはいきません。近からず遠からず、子離れもしなきゃいけないです、親離れもしなきゃいけないです。

最近の傾向では、親のほうに離れにくいような状況があるのかなというふうに思っています。和歌山オレンジ体操クラブに小学校1年の子が来ました。上手なんです。この子、ずっとやってほしいな、いい選手になるかもしれないと思った子なんですけれども、1時間の教室が終わって、「はい、じゃ、今日やったことを5分間だけ時間があるから、復習というか、もう一回自分でやってごらん」とやったときに、やれなかったんです。それで、あっ、おかしいなと思ったので、そのお母さんに何て聞こうと思いつきながら、「お風呂に一緒に入っていますか」と聞いたら、「入っている」と。小学校1年生です。それで入り方も、服を脱ぐのを手伝って、洗ってあげて、拭いてあげて、拭くのもほとんどお手伝いして、そして着がえさせている。お母さん、やめてくださいと。小学校1年です。お泊り保育でも自分でパジャマのボタンをとめるんです。一人で入らせてください。危なかったら、ドアをあけておいてください。子どもはお風呂なんて遊びですよ。きれいにしようと思うのって考えていません。シャボンたてるのも見よう見まねでやって、自分で洗うぐらい、まねするぐらいできます。それで上がってきたときに、ちょっとだけ髪の毛をばっと拭いたりするのをお手伝いしながら、「耳の後ろ洗った、膝の裏洗った、おちんちん洗った」って聞いて、「洗ってない。あっ、忘れた。洗ってない」と言ったら、じゃ、どうしま

しょう。体育系のお母さん、「もう一回行ってこい」と言うんです。遊びのつもりぐらいで入っているのに、罰はないですよね。子どもには耳にたこができてもいいんです。子どもの耳にたこなんかできませんから。「あした洗ってよ」「次は洗ってよ」と言っている回数が多くなってくると、子どもは自然に洗わなきゃいけないとか、洗おうかなと思ひ始めますから、それが自分で行動し始めたときですね。言われて動くの、小さいころからやる必要はないと思います。自分で気づいて、本当にそこが初めて気づくところだろうと思います。ですから、時間がかかります。我慢しなきゃいけないです。

「三つ子の魂百まで」と。これ、いつも私、思います。体操競技はそうなんです。一番最初に基本のいいのをぱちっと入れておかないと、技に進んだ後に、その基本が邪魔をするんです。ですから、基本の一番最初を時間かけます。技はまぐれでもできるんです。そうしたら、まぐれのところまではその子は必ず伸びますから、そのときに、技ができ始めたときに、あっ、この基本ができていない、次に進めないなというようなときが出るのが嫌なので、基本というのは一番先にやります。だから、初めてやるときの初めての脳にインプットすることが大事だろうと思うんです。何歳になっても初めてやることはありますから、そのときはやっぱり三つ子と同じでしょうと思っています。

和歌山県立医科大学の板倉学長先生は脳科学の専門家ですが、子どもにとっては3歳から9歳までが一番大事やというふうに教わったときに、自分自身でも、あっ、それは体操の世界でも間違いのないなというふうに確信ができたときでした。

それから、子どもと接するとき、すぐ教えることと、後から教えること。それから、すぐ怒ることと、後から怒ること、すぐ褒めることと、後から褒めることのこの6場面、これは状況だとか、その子の性格だとかを見ながら、場面を考えています。

ただ、今すぐ言わなきゃいけない危ないことだとか、人に迷惑をかけてというところでは、すぐには言いますが、いつ褒めたら、いつ叱ったら、いつ教えてあげたら一番強いインプットが脳にできるかどうかというのは、たまたま教師をやっていた関係だろうと思いますが、それはこの6場面

の中で考えて、子どもと接するようにしています。

子どもが練習を終わって、私、いつまでもコーチじゃないです。お父さんでいたいんです。だから練習が終わると、ほとんどお父さんに返ります。家の中では体操の話はしません。マスコミさんからも、「家でどんなことをしたの」と言うんですけれども、私、『巨人の星』の星一徹ではありません。体操の話は一切しませんと言います。子どもから聞かれたら言いますが、ですから、普段、あほなことばかり言っていたような気がします。理恵が、「のど乾いた」と言ったら、缶ジュース買ってよとか、ジュース買ってよという意味だろうと思うんですけれども、わざと洗面器に手をつけて、この辺、のどを濡らしてあげて、「おい、湿ったか」というようなこともわざとやっていました。子どもと接するところで、この6場面を私は一番大事にしていたような気がします。この中で、なぜ、こうしたかというのは、きちっと脳にインプットするためには、教えてやること、怒ること、これら6場面を考えて、子どもをきっちり育てていきたいなという思いで、私生活の中でも、競技生活の中でも、そんな思いを持って接しておりました。

ちょうどお時間になったように思います。まだまだいろんなお話はあるのですが、この後の影響もあります。

どうもご清聴ありがとうございました。

